

嘉陵江の水は青く

劉文学 賀宜著 百田弥栄子訳

劉文学

嘉陵江の水は青く



嘉陵江の水は青く

定価六八〇円

昭和四十七年十月十五日 印刷発行

著者 賀 宜

訳者 百田弥栄子

発行者 角田 秀雄

印刷所 大日本印刷

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

嘉陵江の水は青く

目次

渠河のほとりで

7

おかあさんが日雇いに出る

21

九官鳥

40

妹が死んだ

46

牢へゆく

58

にくいかたき

67

仕立て賃をよこせ

75

幸福のはじまり

88

入学

102

夜のお話

122

道でゆきあう

136

水泳の練習

150

忘れがたい授業

167

319	短い針金	306	植樹活動	301	重大な課題	292	悪人のデマを許すな！	279	臨時託児所	265	最初の摘発	257	大きなあか牛が病気になる	246	逃亡犯をとらえる	227	カニ騒動	207	“饅頭岩”の大合戦	197	火事だ	182	“みかんつぶて”合戦	174	みかん集配所
-----	------	-----	------	-----	-------	-----	------------	-----	-------	-----	-------	-----	--------------	-----	----------	-----	------	-----	-----------	-----	-----	-----	------------	-----	--------

向秀麗おばさんに学ぶ

327

月見会

342

幻の『葉の花の王者』

352

壮烈な犠牲

363

書き終えたあとで

376

解説 君島久子

379

嘉陵江の水は青く

渠河のほとりで

すでに午後の三、四時ごろだった。

渠河の岸辺に、掘立小屋があった。枯れくさったふぞろいな板きれのすきまから、凍てつくような冷たい風がようしゃなく吹きこんでくる。部屋の中は冷えびえとしていた。

泥で塗った壁ぎわに粗末な木の寝台がある。二つぐらいの女の子が、ぼろぶとんにすわって泣き叫んでいた。

「かあちゃん、ご飯。ご飯ちょうだい」

仕立て屋の劉銀山は、頭をかかえてためいきをついた。

「なんていうことだ。貧乏人は食ってゆけないんだから。いっそ死んでしまいたいよ」

妻の余太貞は、スープを子供に飲ませようと、しゃがみこんで虫のついたそば豆を洗っていたが、亭主のすてばちな言いぐさを聞きとがめて、いまいましげに言った。

「あんたって人は、何をわけのわからないことを言ってるの。朝から晩まで辛^{しん}氣くさい顔をして家にこもっていきやあ、仕事の方からのこのこやってくるとでも思ってるのかい。ゆきな。ゆけば仕事^{しごと}がみつかるかもしれないじゃないの」

仕立て屋の劉^{りゅう}は顔をしかめた。

「何もしいとは言っていないよ！　こんなご時勢だから、服を注文する客なんて、いるはずないだろう」

まったくそうだった。劉銀山は十一の時から修業して、故郷^{こきょう}の合川^{カチン}渠^{ケン}嘉^カ郷^{キョウ}のあちこちで、何十年も仕立て稼^{かせ}業^{ぎょう}をしている。解放前の長い年月、貧乏人は地主に搾^{さく}取^とされ、ろくろく食^くべることもできなかったくらいだから服を作ることなどまったく縁^{えん}どおいのものだった。だから服を注文できるのは、おおかたが地主や金持ちだった。だがこの連中は、貧乏人の血や油をしぼることしか念頭になく、少しでも甘い汁を吸^すえるとみると、けっしてのがさない。彼らは劉銀山に服を仕立てさせたあげく、あらさがしをし、だぶだぶだの、きついだの、やれ縫^{ぬい}い目が粗^{あら}いだのと言っては仕立て賃^{ちん}をけずる。時には生地をくすねたと言いがかりをつけ、それを楯^{たて}にとつてびた一文払^{はら}わないから、劉銀山はバカをみる。金持ちの世の中、損をしたとて、訴^うえるところなどありはしない。劉銀山は手に職^{しやく}がありながら、昼夜をわかつた根^ねのつづくかぎり働^{はたら}いて、目を真^まっ赤^{せき}にはらしても、一家を養^{やしな}いきれなかった。妻の余太貞も日雇^{ひよめ}いで洗濯^{せんたく}やつくろい物^{もの}をもらい、その日その日をどう

にか暮らしていた。

だが時勢は変わった。今では、金持ちもぱったり服を作らなくなった！

一九四九年の初頭のことだった。解放軍は国民党の反動派を打ち倒し、すでに中国の大半を解放していた。渠嘉郷の地主たちは、もはやこれまでと氣も転倒して、あわてて財産をかくしている。服を作るどころではない。それで劉銀山は完全に失業した。生計の道はたれた。

それでも、一家は食ってゆかなくちゃならない！

いったい、どうしろと言うんだ！ この頃、貧乏な仕立て屋は氣疲れで、氣が狂いそうだった。

小心者の劉銀山は、精も根もつきはてた。だが妻の余太貞は、亭主とは正反對で、氣丈で、さっぱりしていて、せっかちで一本氣、それに性根がすわっていた。同じ生活の苦しみをなめてはいても、ますます筋金入りになってゆくのだ。余太貞は、亭主の相変わらぬ愚痴を聞いて、ますますいらだち、さっと立ちあがって言った。

「いいわ。なら、あんたは、家で休んでるといいわ。わたしがでかけますから」

劉銀山は苦笑して、妻をなだめた。

「おまえさんは、まったくせっかちななあ。わしがでかけたところで、見こみはなかうに……むだ足をふむだけだよ」

それから怒っていらいらしている妻にさからわず、ほころびた襟巻えりまきを首に巻きつけて、出てゆく

うとした。

戸をあけると、さあつと渠河から身を切るような川風が吹きつけて、劉銀山は身ぶるいをした。寒風の中を、五つぐらいの男の子が、何やら手にして、川岸の方からこがりこんできた。やせつけたほつぺたは、寒さで紫色だったが、すばらしい宝物でもみつけたかのように上気していた。

この子供こそ息子の文学ウエンシユエだった。

じつは劉銀山にはこの子の上に子供が二人いたのだが、おそつてくる貧しさと病いとで、みすみす死なしてしまった。夫婦は、子供も満足に育てられない、貧しい自分たちの境遇をのろっていた。一九四五年、陰曆四月二十八日に、この子……文学が生まれ、夫婦は夢かと喜んだ。だが暮らさむきは相も変わらずで、子供はいつもやせた猿さるのように飢えてはいたが、なにより体が丈夫で、病氣らしい病氣もせず、どうやらここまで大きくなった。

この二、三日は食べる物にもことかく毎日で、文学は腹をすかせっぱなしだった。だがこの子は母親そっくりの性質で、背と腹の皮がくつつくほど空腹でも、けろつと忘れて、ちょこちょこと走りまわり、こんな寒い風の日でもへつちやらで、外へとび出してゆく。

隣家には、李小貴リシゲイという、文学とおない年の子供がいて、二人はいつもいっしょに遊んでいた。

この時も、文学は李小貴の家から出てきたところだった。李小貴の家も、文学の家と似たりよつたりの暮らしむきで、父親は合川の町の波止場で担かつぎ人夫をしていた。一昨年、母親が病死したの

で、李おばあさんが小貴の世話をやいている。

ちようど昼時で、李おばあさんは文学にふかし芋をくれた。ひと口ほうばった文学は、ふと母親と妹も何も食べていないことを思い出し、さつま芋を持って、家にかけて、父親とはちあわせしたのだ。

「かあちゃん、かあちゃん、李おばあちゃんがお芋くれたよ。かあちゃんとちびちゃんにあげる」戸口ころがりこむなり、文学は母親のところへ突進した。母親は胸がつまり、芋を半分に割って言った。

「いい子だね。こっちはあの子にやって、これはおまえがお食べ。おかあちゃんはいんだよ。おなかすいていないからね」

文学は、半分を母親の口に押しつけた。

「かあちゃん、食べなよ。食べなってば」

母親はにっこりしてひと口ほうばり、ほろりと涙を流した。そして、亭主にむかって、

「この子をみなさい。しっかりしてるよ。まだ小さいのに、こんなに思いやりがあるんだよ……文学、いい子だね、おまえがお食べ。おかあちゃんは、ほんとうにおながすかないんだから」

文学は、戸口の父親のところへいった。

「とうちゃん、食べて」

「おまえ……わしも腹すいとらん」

そして、がつくりと肩を落として出ていった。

劉銀山は、胸が張りさけそうだった。へ年端^へもゆかぬ子供が、家族のことを心配しているのに、この父親たるわしは、子供にただの一日とて、満足な日を過ごさせたことはない。まったく自分がふがいなくてやりきれん

劉銀山は川ぞいに渠河が崎の方へと歩いてゆき、じきに通りについた。

渠河が崎は、当時、小さな村落だった。渠河はここで嘉陵江^{カリンカワ}へ流れこむ。二つの川の上流で産出した石炭、穀物、それに豚は、大小の船に積みこまれ、ここを通って合川や重慶^{チュウキョウ}へと運ばれていった。時おり、波止場に船をつけて、船のりたちがおりてくる。彼らは茶をくみ、世間話に花をさかせたり、酒をひっかけ、たばこをふかしたりして心身の疲れをいやすのだ。近くの農夫も野菜やくだもの、手製の麦わら帽、竹籠^{たけかご}といったものを売りにきて、日用品を買ってゆく。こうして渠河が崎には小さな市^{いち}がたつ。

茶屋の前を通ると、ほかほかした湯気と、菓子のかうばしい香りがたちのぼっている。ふと見ると、中には、茶を飲んでいる人と、それに二、三のテーブルをかこみ、声をからして賭博^{どばく}に興じている人がいた。

劉銀山は、茶屋にはいらなかった。どこへゆくというあてもないので、ただ通りを歩いてい

った。向こうに見える肉屋の肉切り台の上には、肉がずらりとぶらさがっていた。だがひっそりとしていて、客はひとりもない。小僧が立つて、少なくとも見積もつても五キロはありそうな肥えた豚の腿を、さいている。

ほかにだれも肉屋にいないと思って近づくと、奥の壁ぎわの椅子に、男がひとりすわっていた。獅子鼻で山猫のような目、浅黒い顔とこげ茶のひげのその男は、足を組んでたばこを吸いながら、肉をさいている小僧に目をくばって、あれこれ指図をしていた。

「きちんとそろえて切れよ。塩づけ用のだからな」

「へーい！ 王だんな」

と、小僧が答えた。

その男は渠嘉郷の名うての地主、王榮学だった。この王家には、四人の兄弟がいる。四男はまだ子供だが、上の三人はいずれも村のごろつきだった。長男の王学忠は、国民党軍の大隊長。三男は郷長。次男の王榮学も、あにきの威を借りて、郷の成年班の班長におさまり、悪事のしほうだいで、人々から、「村のダニ」とかげ口をされている。王榮学に気づいた劉銀山は、ごきげんとりに、奥に向かつてお追従笑いをして、ぺこんと頭をさげ、そのまま通りすぎた。二、三步いったとたん、だれかに呼びとめられた。

「劉あにい、何をそんなに急いでるんだ」

ふりむくと、ほかならぬ王栄学だった。

「べつに何も」

と、劉銀山は答えた。王栄学は一步近づいてきて言った。

「ずいぶん久しぶりだなあ。まあ待てよ。じきにすむから。あにきに話があるんだよ」

劉銀山はゆううつになった。いくら王栄学の家と遠縁にあたるとはいっても……以前、劉家の娘が王家の嫁になったことがあるから、劉銀山と王栄学とは縁つづきということになる。だが、今や王家は富みさかえ、劉家は貧乏になるばかり。二人は子供のころいっしょに遊んだこともあったが、今ではもう何年となくゆききがない。たとえ仕立て物にいったとしても、王家では劉銀山を職人としてしかみない。身うちの情など、これっぽっちも示したことはないのだ。

今日はまたどうした風の吹きまわしだろう。王栄学に兄弟分あつかいされて、銀山はすっかりめんくらってしまった。だがきまじめな銀山は返す言葉も知らず、王栄学に言われるままに通りで待っていた。

王栄学は、肉屋から肥えた豚の腿をとって、劉銀山にもたせ、袖をひっぱった。

「ゆこう。わしを送れよ。話があるんだ」

劉銀山は豚の腿をぶらさげて、王栄学のあとから、王家の屋敷へとついていった。この渠河が崎からは約一キロ半たらずの道のり。通りをぬけて、いなかの小道にはいつていった。王栄学は、